**待降節第3主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年12月17日**

**「失敗で終わらない」**

**マラキ書3章23節～24節**

**3:23 見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。**

**3:24 彼は父の心を子に／子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもって／この地を撃つことがないように。**

**使徒言行録９章19節b～31節**

**9:19 サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、**

**9:20 すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。**

**9:21 これを聞いた人々は皆、非常に驚いて言った。「あれは、エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか。」**

**9:22 しかし、サウロはますます力を得て、イエスがメシアであることを論証し、ダマスコに住んでいるユダヤ人をうろたえさせた。**

**9:23 かなりの日数がたって、ユダヤ人はサウロを殺そうとたくらんだが、**

**9:24 この陰謀はサウロの知るところとなった。しかし、ユダヤ人は彼を殺そうと、昼も夜も町の門で見張っていた。**

**9:25 そこで、サウロの弟子たちは、夜の間に彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁づたいにつり降ろした。**

**9:26 サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。**

**9:27 しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。**

**9:28 それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。**

**9:29 また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。**

**9:30 それを知った兄弟たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ出発させた。**

**9:31 こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。**

**待降節・アドベント第3主日を迎えました。いよいよ来週はイエス様がお生まれになられたことを感謝しお祝いをするクリスマス礼拝です。そのクリスマス礼拝を前にして本日私たちに与えられました聖書の御言葉は、回心をしたサウロがその後どうなったのかということが記されてあるところです。**

**キリスト教会を大迫害しキリスト者たちの命を狙うことこそが正しいことだと信じてそれを熱心に行ってきたサウロが、イエス様に出会い目が見えなくなりました。イエス様はアナニアに呼びかけアナニアを用いて下さり、アナニアがサウロの上に手を置くとサウロの目からうろこのようなものが落ちてサウロの目が見えるようになりました。それは視力の回復だけではなくて、今まで見えていなかった信仰の目が開かれたのです。**

**イエス様を迫害する者がイエス様を信じる者へ、それだけでも驚きの出来事ですが、さらに「イエスこそが神の子、救い主である」とイエス・キリストの福音を宣べ伝える者にされたのです。迫害者が伝道者になる、ミイラ取りがミイラになるではないですが、それほどまでに大きな大転換を経験したのです。**

**ただ、サウロのこれまでの様子を知る人たちからするとサウロの大転換は受け入れがたいものでした。迫害していた者が福音を語る、その言葉を聞いても人々は驚くばかりです。**

**「あれは、エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか。」（21節）こう思われるもの無理はありません。それだけのことをしてきたサウロなのですから。ですからサウロが聖霊の力を得て福音を語れば語るほどダマスコにいるユダヤ人たちはうろたえるのです。残念ながらサウロが語る福音を聞いて信じる者は一人もいませんでした。驚きとうろたえ、それがダマスコのユダヤ人の反応です。**

**いえ、それだけではありません。熱心なユダヤ教徒であるユダヤ人からするとサウロは裏切り者です。裏切り者ゆえに命を狙われる羽目になりました。そこはサウロの弟子たちの協力でダマスコから逃げることができました。そしてエルサレムに到着しました。**

**エルサレム、それはあのステファノが殉教した日、サウロが中心となり大迫害が起こったところです。エルサレム教会の信徒たちは、サウロたちによる迫害のためにユダヤやサマリアに逃げざるを得ませんでした。そんなサウロがエルサレム教会にやってきました。「また迫害をするためか」誰もがサウロを恐れました。サウロがキリスト者となった、主の弟子となった、そのことを誰も信じてくれませんでした。ただ一人バルナバを除いては。**

**バルナバ、この名前に聞き覚えがあると思います。バルナバは今回初めて登場する人物ではありません。使徒4:36,37にバルナバについて言及されています(220頁)。**

**「4:36 たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ――「慰めの子」という意味――と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、**

**4:37 持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。」**

**バルナバ、慰めの子と呼ばれ使徒たちや他の信徒たちからも一目置かれていた人物です。自らの財産を投げ打って教会に捧げる熱心な人です。それと同時に、バルナバ「慰めの子」と呼ばれるだけあって慰めに満ちた人です。それは人の弱さや痛みのわかる人であったと考えられます。のちにサウロの同労者となり、共に伝道旅行をし、サウロの良き理解者となる人物です。**

**そのバルナバだけはキリスト者となり伝道者となったサウロのことを信じてくれました。彼はサウロを使徒たちに紹介し、サウロが回心したこと、ダマスコで伝道をしたことを説明したのです。そのおかげでサウロは受け入れられ、エルサレム教会で伝道をすることができるようになりました。**

**さらにサウロはギリシア語を話すユダヤ人と議論しました。パウロはダマスコでもユダヤ人から命を狙われましたが、このエルサレムでもユダヤ人から命を狙われました。それも恐らく「裏切り者」のレッテルを貼られたのでしょう。そのことを知ったエルサレムの教会の兄弟たちはサウロを連れてカイサリアに下りました。「そこからタルソスへ出発させた」と30節にありますので、港町カイサリアから船を使ってタルソスに向かったのです。**

**なぜタルソスなのでしょうか。他の町でなくてなぜタルソスにサウロたちは向かったのでしょうか。それはサウロがタルソスの出身だからです。9：11にイエス様の言葉で「すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。」とあります。タルソス出身のサウロが生まれ故郷のタルソスに帰ったのです。そういうと聞こえはいいかもしれませんが、実際は故郷に逃げ帰ったのです。イエス様を信じる者となって意気込んでエルサレムに向かったものの、最初はエルサレム教会の使徒たちから受け入れられません。バルナバの仲介によりようやくエルサレム教会の仲間入りができ、伝道ができたのですが、それも束の間エルサレムのユダヤ人たちから命を狙われて、生まれ故郷のタルソスに逃げ帰らなくてはいけなかったのです。エルサレムでの伝道活動を諦めて故郷のタルソスに逃げ帰らなければならなかったのです。**

**「志を果たして　いつの日にか帰らん」と「ふるさと」の歌詞の3番にありますが、サウロは志を全くと言っていいほど果たせないまま故郷に逃げ帰ったのです。私の知り合いに都会での成功を夢見て故郷を出たものの、都会に疲れ夢破れて田舎に帰って来たという人が何人もいます。サウロの場合は命を狙われましたから、そのような人たちと次元が違うのでしょうが、志を果たせないで田舎に逃げ帰ったという点では同じです。はたしてこの時のサウロはいったいどのような思いだったでしょうか。どのような思いでタルソスに行く船に乗り、故郷のタルソスに帰ったのでしょうか。**

**この時のサウロの思いは聖書に記されていませんので想像の域を出ないのですが、恐らくはもどかしく悔しい思いでいっぱいだったのではないかと思います。劇的な回心をし、迫害するこんな私を救って下さったイエス様が救い主であるという信仰の喜びを人々に伝えたのに信じてもらえないどころか命を狙われる。さらにはエルサレム教会に行って福音を語ってもまた命を狙われて、ついには故郷に逃げ帰らなければいけない。私はイエス様のために信じた福音を語っているのに、教会のために語っているのに、どうして故郷に逃げ帰らなければならないのか、そのような悔しい思いでいっぱいでタルソスに帰ったと思うのです。物事が全然上手くいかない状況にもどかしい思いをしていたのではないかと思います。私がイエス様を信じたことは間違いだったのか、福音を語ることは間違いだったのか、主の御心はどこにあるのかと毎日主の御心を求めて日々歩んでいたと思うのです。**

**そのようなサウロの姿というのは、私たちが知っている偉大な伝道者パウロの姿からすると非常に意外な感じを持ちます。あの偉大な伝道者パウロとなるサウロが、洗礼を受けキリスト者となり伝道者としての歩みを始めたばかりの時に、伝道は大成功を収めたというのとは全く反対で大きな失敗に終わったというのです。大きな失敗の失意の中で故郷に帰らなければならなかった、そのようなサウロの姿を思う時、何か近寄りがたい偉大な人物ではなくて、私達と変わらない私たちと同じように物事がうまくいかず失敗をしてしまう、そのような身近な人物と見ることができて、何か親近感がわいてくると思うのです。私は伝道者として歩み始めてすぐにつまずいたサウロの姿と自分の姿を重ね合わせて、何か安心感を覚えました。「あのパウロですら最初から上手く行ったのではないんだな」と勝手に親近感を覚えました。もしかしたらサウロは故郷に逃げ帰った時点で「もう伝道者としては終わった」と思ったかもしれません。**

**イエス様はそのような失意の中にあるサウロをお見捨てにはなりませんでした。伝道者として終わったと思っていたかもしれないサウロを、先ほどのバルナバを用いてタルソスに探しに行かせたのです。それはアンティオキアの教会で共に伝道するためです。イエス様はサウロをアンティオキア教会で福音を語る伝道者としてサウロを豊かに用いられたのです。それが後にパウロが大伝道者となるきっかけでありました。イエス様はサウロを豊かに用いて主に異邦人伝道の業を進められたのです。地の果てに至るまであまねく福音が広がるそのために、イエス様は最初は失敗をした、伝道が上手くいかなかったサウロを豊かに用いられたのです。そのことは使徒言行録11：19以下に記されています。**

**私たちはサウロと同じように、いえサウロ以上に失敗を重ねます。神様の為、イエス様の為、教会の為と思って行動するのですが、上手くいかないことがたくさんあります。その失敗の中で「もうだめだ」と思い、失意の中でもどかしく悔しい思いをして過ごすことがあります。「神様なぜですか」と神様の御心を問わずにいられない時があります。時には故郷に逃げ帰らなければならないほどに大きな失敗をすることがあるのです。**

**イエス様はそのような私たちを決してお見捨てにはなりません。失意のサウロを伝道に主の御業のために豊かに用いられたように、サウロよりもずっと小さな小さな私たちを愛して下さり主の御業のために豊かに用いて下さるのです。救いの御業を進めるために私たちを愛して下さり、教会を愛して下さるのです。**

**来週はクリスマスです。イエス様が私たちのもとに幼子として生まれて下さった、その喜びを諏訪のこの地で宣べ伝えていきましょう。**